

アンデスに魅せられた男 天野芳太郎 ——インカ文明取材記——

題字 中川 順

アンデスに魅せられた男 天野芳太郎

——インカ文明取材記——

辻 一郎 (MBS)

天野芳太郎さんという“たぐいまれ”な人物がいた。どう“たぐいまれ”か。それはゆるゆる語るとして、天野さんは戦前から戦後にかけて、中南米を舞台に活躍した実業家であり、そこで得た私財を投じて、アンデスの古代遺跡の研究にとりくんだ人物もある。

私がその天野さんと初めてお目にかかるのは、一九六七年(昭和四十二年)。まだ日本は貧しく、日本人の多くにとって、海外旅行が夢の時代だった。となると、外国の



天野家の前で天野夫妻(1973・8)

実情をくわしく知りたい。特に外国人に住む日本人の生活に興味がある。そうした要望をふまえて、海外に住む日本人を紹介するドキュメンタリー番組が企画された。私たちにはこの取材で、天野さんをペルーにたずねたのである。

私は番組の意図を説明し、「ついでに、クスコやマチュ・ピチュにもご一緒いただきたいのですが」と切りだした。このころ彼は六十九歳。お若いとはいえないお歳だけに、ご承諾いただけるかどうか、危惧しながらのお願いだった。

しかし案に相違で、「いいでしょう。行きましょう」とのご返事を得た。それを聞いてホッとしたことを思い出す。

「これでいい作品になる」安堵感がひろがった。

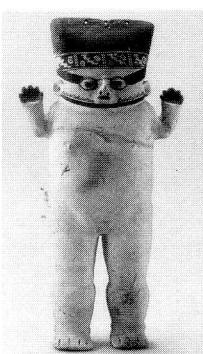
取材には、お宅に隣接した天野博物館を手はじめに、その日から早速とりかかった。当時、海外取材の三十分番組にかけられる日数は、せいぜいが十日前後。それでもかなり贅沢だと見られていた。あまり時間の余裕がなかつたのである。

天野さんはペルー、リマの閑静な住宅街、ミラフローレスで、美しい奥さんと暮らしていた。まだ東大の助教授だった泉靖一さんが友人から天野さんを紹介されるにあたって、「インカやプレインカのコレクションよりも素晴らしい」と聞かされた美代子夫人である。

博物館には天野さんが発掘し収集したプレインカやインカの素晴らしい土器や織物が収納されて、カメラマンが説明を聞きながら撮影するさまを、胸おどる思いで眺めていたのを思い出す。

インカは文字をもたなかつた。

書きのこされた記録はなく、伝承も、征服したスペイン人の手で無惨に抹消された。往時をうかがわせるものといえば出土品しかない。インカ研究にとりくむ天野さんが、発掘に情熱をかたむけたのは、そのためである。なかでも基点にしたのは、十二世紀のプレインカの遺跡チャンカイだつた。



チャンカイの彩土器
徳光ゆかり撮影

遺跡はリマの北方六十キロ。不気味なほど静まりかえった山あいの砂漠にひろがつていた。ふと見ると、茶色く変色した髪の毛をつけたしゃれこうべが、ころがつてゐる。盗掘者が墓跡をあらし、金目になるものを持ち去つたあとらしい。

チャンカイには、王侯貴族の墓跡はない。だから布につつまれたミイラと一緒に出てくる土器や首飾り、土偶などは、いずれも庶民が使つていた品である。

「それでいて、どうです。この布の色あざやかなこと、絵柄はこんなにモダンです。壺に描かれている表情も、ユーモラスで実に素晴らしい。ぼくが夢中になつてゐるわけがわかるでしょ?」

こう話をしてくれたときの天野さんは、失礼をかえりみずにいえば、まるで未来に夢を託している青年のようだつた。彼の目はキラ

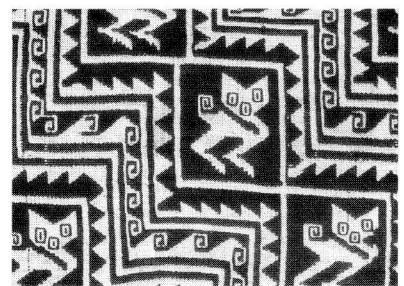
手したのは一九五二年。以来、すでに十五年がたつてゐた。しかしよいよミイラをとり出すといでつけないのだと聞かされた。

「千年近くも昔に埋められて以来、だれも見ていないものを、はじめ見て見るという感激は、お話ししても、わからないと思ひます。いま前夜には、いまだに興奮して、寝つけないのでと聞かされた。

私たちが天野さんとご一緒に、かつてのインカ帝国の首都クスコにむかつたのは、その翌日である。クスコの町は、高度三千三百六十メートル。富士山の頂上よりは低いが、北アルプスの槍ヶ岳よりは大分高い。

「着いても急いでいけません。すり足でソロソロと歩いて下さい。午前中はホテルでのんびりして、体を高度に慣らせましょ。ビルもしばらくひかえて下さい」

先生に引率された生徒のように、私たちには天野さんの指示にしたがつて行動した。思えばあれはとても贅沢で楽しい時間だつた。一緒に、町の中心部から近郊の村、サクサイワマンの砦と訪ね歩き、



チャンカイ遺跡の織物
徳光ゆかり撮影



マヒコ・ピヒコの遺跡 桶口正輝撮影

くない。日本人がこれまで手がけていない商売にとりくもう。そして選んだのが、パナマでの雑貨店だった。

ガムの『Lost City of The Inca』にめぐりあつた。アンデスの山深く、密生した笹竹と蔓草のむこうに、インカの失われた都市を発見したという報告である。この本との出会いが、彼のその後の人生を変えることに結びついた。

二十世紀になつても、またこんな口マンがのこつていたのか」
彼は店は支配人にまかせ、早速リマにとび、マチユ・ピチュにむかつた。片道一週間の旅だつた。
まだインカの遺跡など、誰も見向きもしなかつた時代である。

ものを買うにあたっては、値切
る行為を楽しむのが中南米の文化
である。噂を聞いた人々は、値
切りに応じない商法が、まり通
るかどうか、懸念した。しかし意
外なことに、これがあたつた。天
野さんは二年後には支店をもうけ
翌年さらにもう一軒、支店を増や
した。

雑貨店が軌道にのつたと判断すると、彼は次の事業の準備にとりかかつた。危険分散の意味もあって、『一国一業種』が信条だつた「とすれば、次は何を手がけるか

ビルカバンバの峰の上に、巨大な都市がひろがっている。神殿跡の見事な石づみ。その石づみの一つかつひとつが、インカの栄光と滅亡の歴史をきざんでいる。見上げる空はどこまでも高く、幾何学的な線を描く石段のむこうには太陽神を祭つたであろう宮殿がそびえている。その周囲には、荒れはてた段段畠がつづいている。

「これこそ、まさしくスペイン人

の目から逃れ、破壊をまぬがれた太陽の都にちがいない。美しい太陽の処女たちが、ここで神につかえ、機を織つていたのだろう。こモロコシがたわわに実つていたのにちがいない」

天野さんは瞑想にふけつてときを忘れ、滞在は五日におよんだと

彼がインカ文明の解説にとりくむことを決意したのは、このときからである。天野さんはまだ三十七歳だった。

以来、三十年余。私たちが六十九歳の天野さんと一緒にマチュ・ピチュを訪ねたとき、かつてあたり一面をおおつっていた竹籠は綺麗に刈りとられ、ひとまわりするだけで四日間もかかった「謎の空中都市」が、三時間でまわれるようになっていた。「蛮族の文明」くらいにしか見られていなかつたインカ文明への世界の認識はすっかり変わり、研究する学者やおとずれる観光客が増えている。

その日も、宮殿の石ぐみのすぐそばでは、ヨーロッパから来たらしい若いカップルが、写真をとり

あつて楽しんでいた。晴れた空には白い雲がうすくなびき、そのうしろにインカの兵士も眺めたであろうアンデスの白い峰々がそびえていた。ときが止まつたような静寂のなかで、見渡すかぎりの風景は、雄大で、のどかで、おおらかだつた。

アンデスの山中ですごした数日間、私たちは昼間、遺跡を訪ねて取材し、夜は天野さんの話を聞いて楽しんだ。テーブルには酒があり、飲むほどに天野さんの話しつぶりは精氣にあふれた。話題はインカの歴史や文明にはじまり、太平洋戦争で狂わされたご自分の人生の軌跡にいたるまで、つくるところがなかつた。

天野さんは戦前、パナマの雑貨店について、チリで農場、コスタリカで漁業、エクアドルで製薬、ペルーで木材、ホンジュラスで鉱山と事業をひろげ、そのすべてを軌道にのせた。しかしその事業は太平洋戦争の勃発で、敵性外国人のものとして、すべて閉鎖され、

そのとき接収された資産は五百五十万ドルにのぼるといわれてい

る。一ドルが四円だった時代の五百五十万ドルである。日本円で二千二百万円、いまの価値になおせば、おそらく二百五十億円を軽くこえる資産だつたにちがいない。自身も捕虜交換船で日本に強制送還される憂き目をみた。しかし天野さんの凄さは、その混乱なんか、ちやっかりとペルーに十万ドルの送金をしていることである。開戦の前日、彼はナショナル・シティバンクのパナマ支店長から連絡をうけた。「天野さんには長い間、お世話になりました。しかしおつきあいの終わるときがきたようです。本店から、日本人の預金は間もなく封鎖されるだろうとの情報が入りました。いまならまだ間にあります。必要なだけ引き出してください」。勧めに応じて預金を引き出し、その一部をペルーに送つたのだ。

ただこのことは、あとであらぬ疑いを招くことになつた。開戦と同時に入れられた収容所で、「お前は戦争がはじまるのを知つていたのだろう。そうでなければ、預金を全額おろすわけがない。お前は日本のいつたい何なのだ」と、スペイ呼ばわりのきびしい取り調



天野芳太郎さん(1971・2)

べをうけることになつたのだ。日本に強制送還された天野さんは、以後、手もちぶさたの日をすごした。戦争が終わつても占領下の日本では、一般人の海外渡航は容易には許可されない。おまけに天野さんはスペイ容疑で、プラックリストにのせられている。

戦後六年目、このままではダメだと判断した天野さんは、日本から脱出することにした。目的地は十万ドルを送つていたペルーである。パスポーツもビザも持たずに敢行した無謀な脱出だつた。しかしチエをしぶり、奇蹟的にペルーへの入国をはたした。

このくだりになると、天野さんの口調は、一層なめらかになり熱をおびる。その波瀾万丈の物語は一冊の本が書けるほど面白い。しかしここではふれる余裕がない。

日本に強制送還された天野さんは、以後、手もちぶさたの日をすごした。戦争が終わつても占領下の日本では、一般人の海外渡航は容易には許可されない。おまけに天野さんはスペイ容疑で、プラックリストにのせられている。

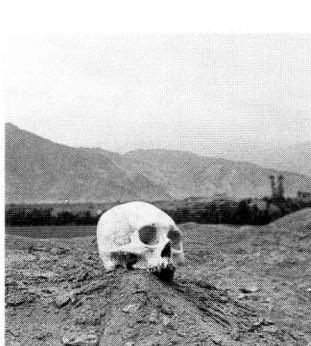
戦後六年目、このままではダメだと判断した天野さんは、日本から脱出することにした。目的地は十万ドルを送つていたペルーである。パスポーツもビザも持たずに敢行した無謀な脱出だつた。しかしチエをしぶり、奇蹟的にペルーへの入国をはたした。

このくだりになると、天野さんの口調は、一層なめらかになり熱をおびる。その波瀾万丈の物語は一冊の本が書けるほど面白い。しかしここではふれる余裕がない。

天野さんは、他人と同じことをして儲けるくらいなら、何もし

世界に売ることにした。世界に売ることにした。天野さんはまたたく間に、ふたたび一財産を築きあげた。次に漁業にかかせない漁網をつくる会社をつくり、これも成功させた。そうなると、心がせく。彼は仕事を思い切つて整理し、インカ研究に本格的にとりくむことにした。

アンデスの山中で聞いた天野さんの話は、私の胸をおどらせた。あまりの面白さに、すっかり興奮した私は、「伝記を書かせてほしい」とお願いした。しかし「まだ早すぎる」と断られた。伝記をお願いして断られたひとは、ほかにもいると聞いている。作家の今東光さんや東大の泉靖一さんなども、そのお仲間らしい。



チャンカイの遺跡(1971・2)

ない方がマシだという哲学がある。その哲学に則しての決断だつた。ところが手をひいて間もなく、漁場である。沖合を流れるフンボルト寒流と暖流との接点にプランクトンが発生し、このプランクトンを追つて、かたちち鰯の大群があつまつてくる。網を入れると、面白いようにどれ。これを魚粉に加工して、ペルーだけでなく、

ペルーでは、アンチヨビ(かくち鰯)から魚粉を製造する会社をつくつた。ペルーは世界有数の漁場である。沖合を流れるフンボルト寒流と暖流との接点にプランクトンが発生し、このプランクトンを追つて、かたちち鰯の大群があつまつてくる。網を入れると、魚粉は生産過剰になつて暴落し、たくさんの同業者が倒産した。「天野さんはなんて幸運な男なんだ」人々はそう噂したが、これは彼の先見性がもたらしたものだつた。



チャンカイの遺跡(1971・2)

「若いときは、自分が努力したから、うまくいったと考えたことがあります。いま思うと恥ずかしいかぎりです。人生で努力がみる可能性は、僅かに一パーセントすぎません。九十九パーセントは運命です。運命が加担してくれなければ、何ごともできないものだと思うようになりました。

フランス・ピサロがこの国に来るのが、もう少し早かったら、あるいは遅かつたら、インカ皇帝のアタワルパはクスコにいて、捕らえられることはなかつたかもしません。ピサロの手勢がもう少し多ければ、インカ軍は油断しなかつたかもしれません。歴史の事

んは、「これだけは言つておかなくては」といった表情で、こう述懐した。「若いときは、自分が努力したから、うまくいったと考えたことがあります。いま思うと恥ずかしいかぎりです。人生で努力がみる可能性は、僅かに一パーセントすぎません。九十九パーセントは運命です。運命が加担してくれなければ、何ごともできないものだと思うようになりました。

ペルーでの十日間は、またたく間にすぎた。天野さんと別れを告げることになったとき、彼はにっこり笑つてこういつた。
「この国を好きになつたひとは、三度、この国に来るといわれています。辻さん、あなたはどうやらインカをお好きらしい。あと二度予言どおり、ペルーへはその後

七年十月、国際交流基金賞を受賞。その二週間後、八十四歳で亡くなつた。

彼がのこした天野博物館は、いまは美代子夫人が守つている。四度目のペルー訪問をはたして、もう一度ゆつくり楽しみたいというが、目下の私の夢である。私も何時の間にか、あのころの天野さんの年齢に近づいた。

数年おきに二度訪ね、その都度、天野さんのお宅でお酒をご馳走になりながら、滅びた文明への熱い思いをうかがつた。

大いに楽しみながら取材したこの番組は、一九六七年から六八年にかけてとりくんだ「世界の日本人」シリーズの一本として放送した。時間は毎週木曜日の午後七時

実がほんの一寸ちがついたら、インカは滅びなくてすんだかもしないのです。しかしそれをいつて、何になりますよ。」追憶“哀惜”、月並みでセンチメンタルな表現は、いくらでも思いうかびますが、何もかもひつくるめて、運命だと思います」

杯を重ねて、天野さんは少々、酩酊気味のように見えた。

辻一郎氏略歴・テレビ報道番組で民間放送連盟賞、ギャラクシー賞等を受賞。取締役報道局長、テレビ編成局主幹を経て退社。現在大手前大学教授。著書に『忘れえぬ人々』『父の酒』等。